

「二季化」とミッシェル・ガン・エレファントのデビュー曲

二季という言葉聞いたことはありますか。国連のアントニオ・グテーレス事務総長が昨年7月に「地球沸騰化」の到来を訴えましたが、もちろん日本でも10月に入っても汗ばむし、12月中旬でも20度を超える日がありました。異常高温は豪雨や豪雪をもたらす自然災害を招きますが、自給率が高くない日本では食糧問題の声も上がっています。あと2・3ヶ月も経つと桜の季節になるはずですが、昨年5月のニュースで驚くようなことを耳にしました。「気温が高くなり、この100年で桜の開花は2週間早まった。ところが、温かくなり過ぎると桜は遅く咲く。すでに鹿児島島のソメイヨシノの開花が遅くなってきている。鹿児島では50年後に桜が咲かない可能性もある」とのことです。桜が咲かなくなり春も秋もなくなれば、我々の生活に支障をきたす可能性があるわけですが、四季に結びついた我々の感性や美意識が大きく変わることも心配になります。

平安時代の勅撰和歌集が春夏秋冬と季節ごとに歌を分類したことからも分かるように、四季は我々日本人の喜怒哀楽と深く結びつき、多く文学作品を残しています。今手元にあるのは川端康成の「掌の小説」。122編からなるこの本をめくるとタイトルはもちろんですが、春夏秋冬の風物が登場人物の気持ちや思いを表象していることが多いです。また「海から帰った娘達が栗毛の駿馬のように街を歩き出した秋の初め」（「秋の雷」より）などの印象深い描写も四季と結びついているのは言うまでもありません。

もちろん、世界中には四季のない国もあります。しかし、良くも悪くも日本人には「あいまいさ」を好む感覚があるように思います。そうしたものは、季節の移ろいや季節の微妙な変化の中で、日本人の遺伝子に組み込まれたのではないかと考察します。つまり、日本人は物事を白黒二分することが苦手で、桜のつぼみを見て「春めく気配」を感じるのが得意なわけです。原田芳雄氏が「ブルースで死にな」（阿木耀子作詞）の中で歌った「春は嫌だね しんと寒いよ」という春がやっぱり好きで、チャンネルを変えるようにすぐに季節が切り替わると困ってしまうわけです。断捨離で「要るもの」と「要らないもの」を二分することも難しいのに、季節が夏と冬だけに二分されるって、「世界の終わり」のような気がしてきます。（一年を二季で過ごしている世界の皆さん、すみません）

さて、いきなりですが、「世界の終わり」といえば、ミッシェル・ガン・エレファントのメジャーデビュー曲です。「世界の終わりが 　そこで見てるよと 　紅茶飲み干して 　君は静かに待つ 　パンを焼きながら 　待ち焦がれてる」と歌ったチバユウスケ氏は、昨年の11月にガンで亡くなりました。（私より若いのに本当にショックです）私は2002年に福岡でライブを観ましたが、これまで観た中で一番のライブでした。「世界の終わり」は、最高に「イカしたナンバー」（その頃はライブのラストナンバーになっていました）でしたが、ホントウの「世界の終わり」は全然イカしていません。これからの環境問題は確実に人類の存亡につながっていると思います。環境問題は確実に人類一人ひとりの問題になっています。今年は生徒たちにもそんな話をしたいとも思っています。

ところで、「イカす」「イカしてない」は死語？ 私が「ヤング」な頃は「ナウい」人たちが使う流行語だったような気もしますが。（もちろん「バッチグー」は死語です）

それでは、今年もよろしくお願ひいたします。

令和6年1月9日 大村城南高等学校長 中小路尚也